

ケアセンターけやき

症例概要 利用者：80歳台（女性 要介護4）

利用期間：2023年4月～2024年7月

病名：うっ血性心不全、低カリウム血症、アルツハイマー型認知症、高血圧

腰部・頸部脊柱管狭窄症、便秘症、斜頸、不眠症、頻尿症

経過：2016年8月まで在宅生活を続けられましたが、認知機能低下と転倒により2020年1月にグループホームへ入所。嚥下機能の低下から医療的ケアが必要となり、2023年4月にけやきへ転入所となりました。入所当初は3食とも経口摂取可能で、特にコーヒーを飲まれる時は「おいしい」と微笑まれ、娘さんの手をそっと握られることもありました。2024年6月頃から食事摂取が困難となり、経管栄養の提案もありましたが、ご本人の「点滴は嫌だ」という意思をご家族も尊重。その後は、お好きだったコーヒーやゼリーを少しでも召し上がっていただけるようSTが介入し、各事業所の緊密な連携により、最期までご本人とご家族の想いに寄り添えた症例です。

内 容

2016年の夏、認知機能の低下が疑われ、要支援認定を受けられました。娘さんは、母の変化に戸惑いながらも、できる限りのサポートを始められました。

普段は夫とともにご自宅で穏やかに過ごされていましたが、認知機能は徐々に低下。2020年1月、安全な生活を確保するため、グループホームへ入所されることになりました。

2023年4月、介護の必要度が高まり、前のグループホームでは十分な対応が難しくなったため、より手厚いケアが可能なケアセンターけやきへ移られました。入所後しばらくは経口摂取も改善され、穏やかな日々を過ごされてきました。しかし、時間とともに認知症は進行し、活動性や嚥下機能も低下。同年11月20日、昼食中に誤嚥が発生しましたが、迅速な対応により大事には至りませんでした。

2024年に入ると、状態は更に悪化。2月頃から傾眠傾向が強まり、食事を受け付けないことも増えていきました。娘さんは頻りに母の元を訪れ、好物を持参しては食事を促されていましたが、6月には全く摂取できない状態となりました。医療スタッフと相談の結果、経管栄養は避け、点滴でのフォローを開始。その際、ご本人が「点滴は嫌だ」と意思表示されたことを、ご家族と医療スタッフ一同が深く受け止めました。

「もう一度、母に好きな物を味わってほしい」

この娘さんの切なる願いから、言語聴覚士の介入が始まりました。普段は嚥下困難で痰の吸引が必要

な状態でしたが、誤嚥性肺炎のリスクに細心の注意を払いながら、ベッド上での姿勢調整や覚醒状態の良い時間帯を見極めることで、少量の水分やゼリーの摂取が可能となりました。久しぶりに食べ物を口にした時、ご本人は「まあまあね」「良かった」と穏やかな表情を浮かべ、その言葉を聞いた娘さんは思わず母の手を優しく包み込みました。言語聴覚士から介助方法の指導を受けた娘さんは、最期の1か月間、単なる栄養補給ではなく、愛情と思い出に満ちた貴重な時間を母と共に過ごすことができました。

エンゼルケアの際、ご家族から『ここに来て本当に良かったです。けやきさんを選んでいなかったら、母は最期に食べる喜びを取り戻すことができなかつたと思います。』とのお言葉をいただきました。医療と介護の緊密な連携、そして入居スタッフと訪問言語聴覚士の丁寧なケアにより、ご家族には安心と感動を、ご入居者さんには人生最期の輝きのある日々をお届けすることができました。

今後もお本人、ご家族の気持ちに寄り添いながら、ケアセンターけやきの各事業所が連携を取り、より良い支援に取り組んでまいります。